長野市の埋蔵文化財第175集

浅川扇状地遺跡群

稲 添 遺 跡（2）

――（仮称）中村医院新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書――

2024年 3 月

長 野 市 教 育 委 員 会

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、悠久の歴史の中で、多様な人々の生活が営まれてきました。各地に残る伝統行事や歴史的建造物などの文化財は、郷土の成り立ちや文化を理解する上で欠くことのできないものです。中でも土地に埋蔵されている遺跡やそこに存在する遺構・遺物は、私たちの祖先の知恵と文化の集積であるとともに、当時の人々の暮らしぶりを現在に伝えてくれる貴重な財産です。

ここに長野市の埋蔵文化財第175集として刊行いたします本書は、（仮称）中村医院新築工事に伴って実施した、浅川扇状地遺跡群に属する稲添遺跡に関する調査報告書であります。

発掘調査では、弥生時代中期から平安時代と推定される集落の一端が検出され、本遺跡としては初めての竪穴建物跡が見つかりました。この調査成果が地域の歴史解明の一助として、そして文化財保護に広くご活用いただければ幸いであります。

最後に、埋蔵文化財保護に対する深いご理解のもと、この調査にご協力いただいた事業者並びに地域の皆様、また、発掘作業に携わっていただいた皆様方に厚く御礼申し上げます。

令和６年３月

長 野 市 教 育 委 員 会

教育長　丸山　陽一

例　言

1　本書は、「（仮称）中村医院新築工事」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2　発掘調査は、医療法人新緑会中村医院 理事長 中村潔 と、長野市長 荻原健司 との間で締結された「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」に基づき、長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター担当）が実施した。
3　調査地は、長野県長野市稲田二丁目1203番 外 に所在する。調査面積は690m²である。
4　発掘調査は令和５年４月５日～25日に実施した。また整理調査は調査終了後から令和６年３月まで行った。
5　本書の編集・執筆は清水竜太が担当した。
6　調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター所管）で保管している。なお、出土遺物の注記に使用した本調査の略記号は「IZN」である。

凡　例

1　本書は、調査によって確認された遺構・遺物のうち、時期の明らかなものを中心に報告した。
2　遺構図の方位は座標北を表している。
3　基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系の第Ⅷ系（東経138° 30′ 00″、北緯36° 00′ 00″）の座標値（日本測地系2011）と、日本水準原点の標高を基準とした。
4　遺構名は次の略記号を用いて表記した。竪穴建物跡…SB、溝跡…SD、土坑…SK、小穴…SP
5　遺構実測図は、１/20で作成した原図をもとに１/80で掲載した。
6　遺物実測図は、原寸で作成した原図をもとに土器１/４、土器断面１/３で掲載した。
7　遺構写真・遺物写真の縮尺は任意である。
8　土器実測図において、断面黒塗りは須恵器を表す。

目　次

第Ⅰ章　調査の経緯……1
　第１節　調査の契機と事務経過……1
　第２節　調査の経過と方法……3
　第３節　調査体制……4
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境……5
　第１節　遺跡の立地……5
　第２節　周辺の遺跡……5
　第３節　稲添遺跡一次調査の概要……6
第Ⅲ章　調査成果……8
　第１節　調査の概要……8
　第２節　遺構と遺物……10
　第３節　まとめ……12
写真図版

【挿図目次】

図１　調査地位置図（広域）……1
図２　調査地位置図（詳細）……2
図３　調査範囲図……2
図４　周辺遺跡位置図……6
図５　一次調査地点調査区全体図……7
図６　基本層序……8
図７　調査区全体図……9
図８　SB１実測図・出土遺物実測図……11
図９　SD・SK・SP出土遺物実測図……11
図10　遺構外出土遺物実測図……12

【表目次】

表１　遺構一覧表……10
表２　土器観察表……12

【写真目次】

写真１　表土掘削（４月５日）……3
写真２　北東部撹乱坑（４月６日）……3
写真３　遺構検出作業（４月７日）……3
写真４　遺構測量（４月21日）……3

第Ⅰ章　調査の経緯

第１節　調査の契機と事務経過

調査地は長野市北部の若槻地区に所在する（図１）。若槻地区は、1970年代から1990年代にかけて県道長野荒瀬原線や都市計画道路北部幹線などの整備が進み、宅地化・商業地化が著しい地域である。こうした中、住宅街の一画に医院の新築工事が計画された。計画地は浅川扇状地遺跡群内に位置し、昭和63・平成元年度に実施された稲添遺跡の発掘調査地（以下、一次調査地点）に隣接することから（図２）、開発区域834.61m²の全面を対象に記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。調査に関わる事務経過は以下のとおりである。

令和３年度

３月２日　　埋蔵文化財包蔵地の照会。埋蔵文化財の保護に関する手続が必要となる旨を伝達。

３月30日　　「試掘調査依頼書」を受理。

令和４年度

５月12日　　試掘調査。事業地の南西・北西・北東の３箇所に試掘坑を設定し、撹乱が深くまで及んでいた

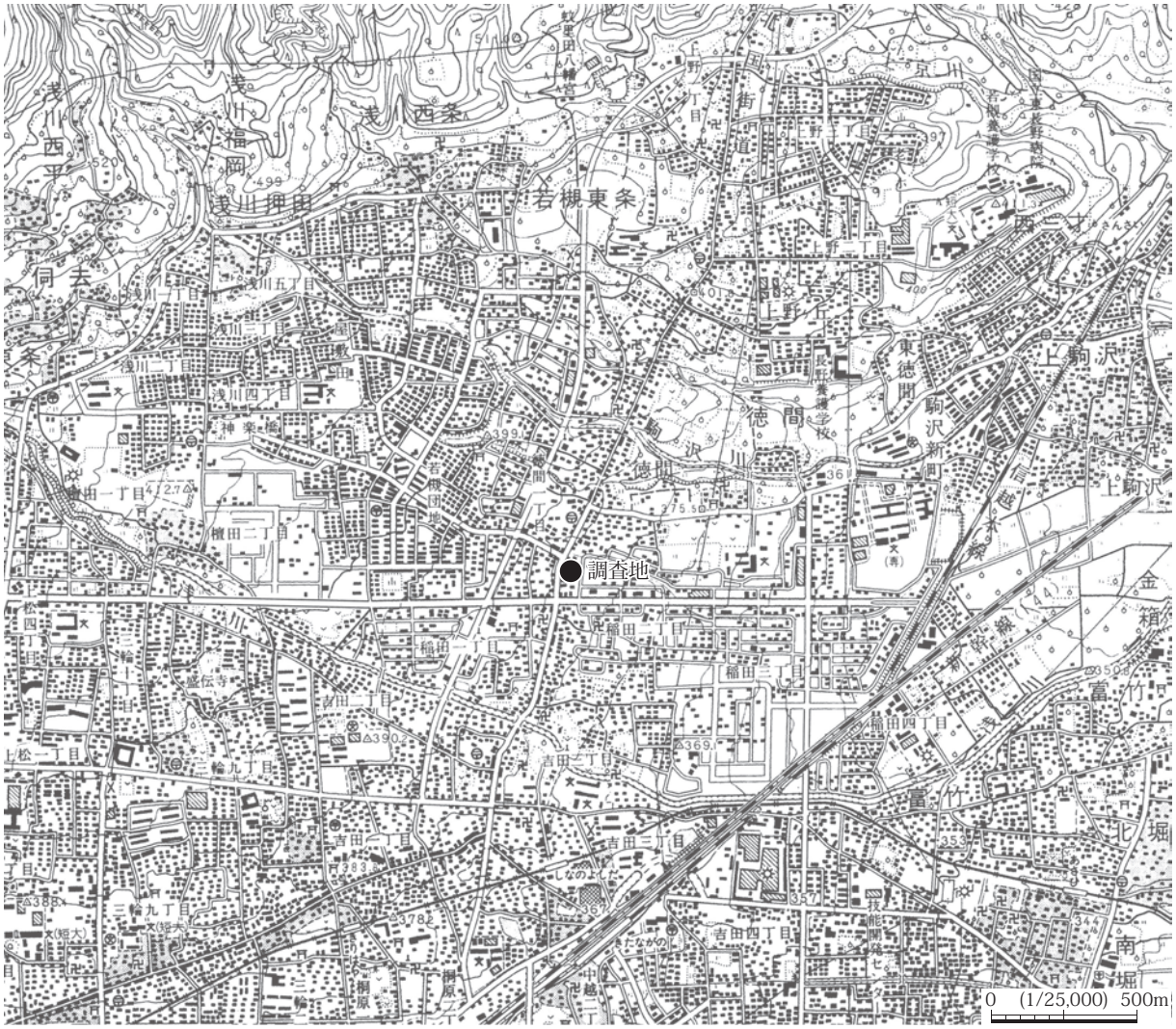


図１　調査地位置図（広域）

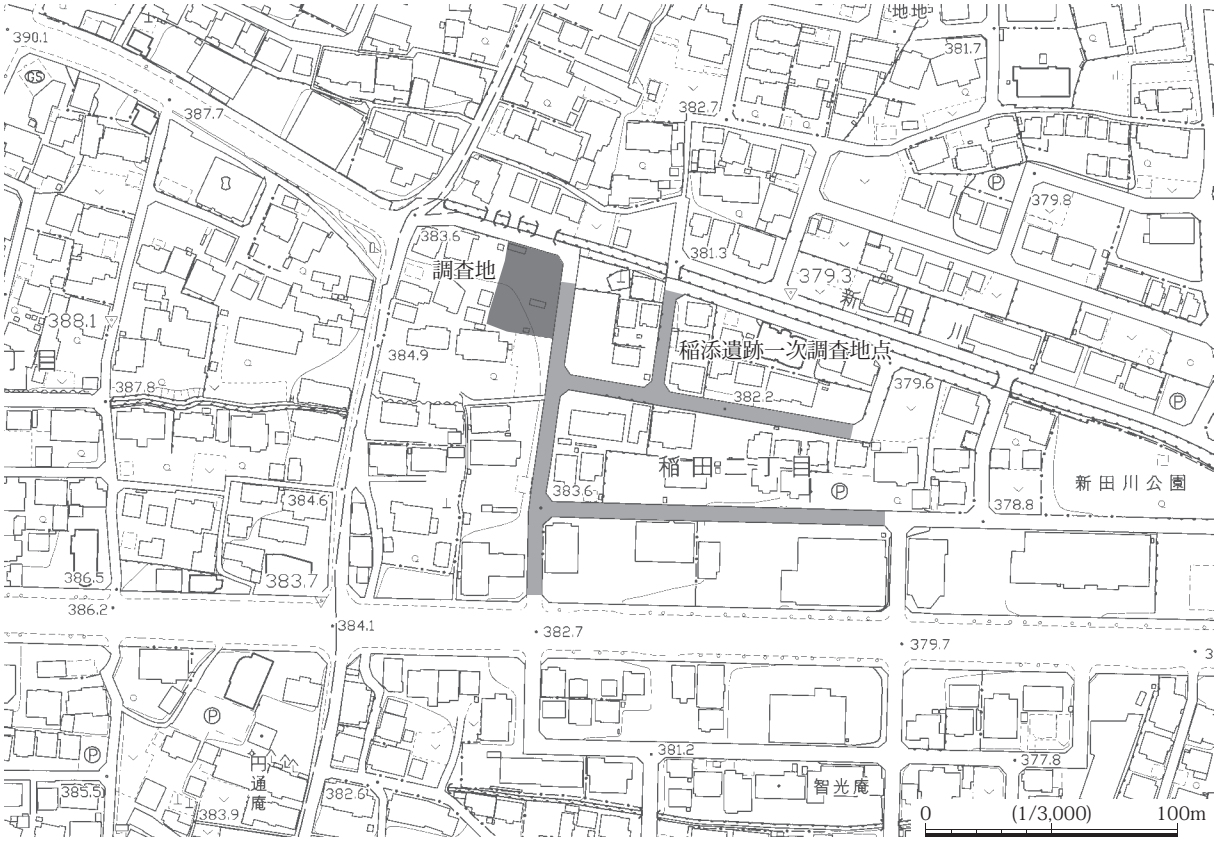


図２　調査地位置図（詳細）

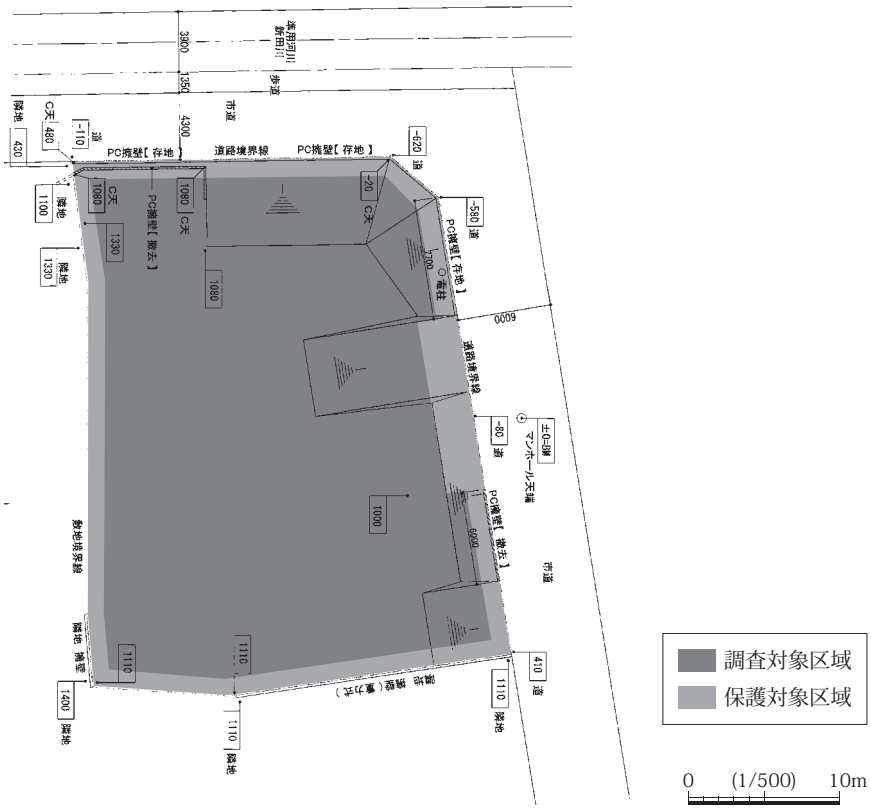


図３　調査範囲図

北東を除く２箇所で包含層を確認。

５月18日　　４埋第５－４号にて試掘結果を報告。

12月20日　「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書」を受理。

１月６日　　４埋第２-318号にて発掘調査を指示。

令和５年度

４月３日　「埋蔵文化財発掘調査委託契約」締結。

４月５日～25日　発掘調査。

３月１日　「埋蔵文化財発掘調査委託変更契約」締結。

第２節　調査の経過と方法

重機による表土掘削は、発掘調査委託契約の締結に先立つ３月27日から本体工事の一環として開始し、４月６日まで行った。調査範囲内には複数箇所の撹乱坑が認められ、とりわけ大規模な北東部のもの（写真２）は重機で埋土を除去して遺構のないことを確認したうえ、廃土置場として利用した。発掘作業員の雇用は４月７日から開始し、７日から13日まで遺構検出、13日から21日まで遺構掘削、21日に写真撮影を行って終了した。そして21日から24日に遺構測量を行い、25日に器材を撤収して現地におけるすべての作業を終了した。

調査記録のうち遺構測量は、株式会社写真測図研究所に委託した。また記録写真は、35mm 判フィルム一眼レフカメラを使用してモノクロネガフィルムおよびカラースライドフィルムで撮影し、APS-C サイズデジタル一眼レフカメラを補助的に併用した。

現地作業終了後は整理作業を順次進め、令和６年３月29日の本書の刊行をもってすべての作業を終了した。

写真１　表土掘削（４月５日）

写真２　北東部撹乱坑（４月６日）

写真３　遺構検出作業（４月７日）

写真４　遺構測量（４月21日）

第３節　調査体制

本調査は、長野市教育委員会の直轄事業として長野市埋蔵文化財センターが実施した。その組織は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	丸山　陽一
総括責任者	長野市教育委員会	教育次長	藤澤　勝彦
総括管理者	同　文化財課	課　長	石坂　陽子
調査責任者	同　長野市埋蔵文化財センター　主幹兼所長兼大室古墳館長		飯島　哲也
調査担当者	同　文化財課（埋蔵文化財センター担当）	課長補佐	風間　栄一
庶務担当者	同　長野市埋蔵文化財センター	所長補佐	伊藤　慶順

調査機関　長野市埋蔵文化財センター

庶務担当	主　事	小林　和子
同	事務職員	宮本　博夫、平林　満美子
調査担当	主事(学芸員)	鹿田　奨之（調査員）
同	研究員	清水　竜太（主任調査員）
		千野　浩、青木　一男、田中　暁穂、井出　靖夫、山岸　龍二、越志　凪沙

発掘調査員	向山　純子
発掘補助員	後藤　大地
発掘作業員	青山三枝子、上原　律江、植木　義則、江守久仁子、大谷　盛孝、岡沢　貴子、金井　節、杉本　千代、月岡　純一、中村　泰明、早川　美加、峯村　茂治、宮尾　弘子、宮本　正守、向山　久、渡辺　由美
整理調査員	青木　善子、市川ちず子、鳥羽　徳子、半田　順子
整理作業員	飯島　早苗、清水さゆり、西尾　千枝、待井かおる、宮坂　陽子、宮島　恵子、三好　明子
遺構測量委託	株式会社写真測図研究所
重機等現物提供	医療法人新緑会中村医院（本体工事請負業者：株式会社アスピア）

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の立地

稲添遺跡が所在する長野市は、飯縄山・戸隠山・黒姫山などの北信五岳を背負う長野県北部に位置し、千曲川の下流に広がる長野盆地の大半と、西側の西部山地、東側の東部山地に市域を有する。市内には約1,100箇所の遺跡があり、本遺跡を含む大多数の遺跡は長野盆地に立地する。

古くから善光寺平と呼ばれる長野盆地は、千曲川と犀川の合流地点を中心にひらけた中央高地内陸部を代表する盆地である。長さ約35km、幅約10km の南西－北東方向に延びる紡錘形を呈し、南端の千曲市稲荷山付近で標高360m、北端の中野市延徳で同330m と、きわめて平坦な地形をなしている。盆地床を構成するのは、中央を北流する千曲川の氾濫原と、東西の山地から流下する河川の扇状地で、大半が後者である。本遺跡が立地するのは盆地北部を占める浅川扇状地の扇央部である。調査地は扇頂から2.3km 東の標高383m 付近に位置する。調査地のすぐ北には浅川支流の新田川が東流し、周辺の地形には扇状地面の南東に向かう下り勾配と北の流路に向かう落ち込みが観察される。

第２節　周辺の遺跡

市内有数の遺跡密集地である浅川扇状地は、その全域が「浅川扇状地遺跡群」に登録され、これまで多くの発掘調査が行われている（図４）。本節では、浅川扇状地遺跡群およびその隣接地に所在する遺跡のうち代表的なものを時期ごとに概観していく。各遺跡の詳細な内容については報告書を参照されたい。

縄文時代の遺跡は、扇状地扇頂部から扇央部にあたる浅川地区・若槻地区・吉田地区の浅川沿いに点在している。松ノ木田遺跡（４）は、前期後葉・中期後葉・後期にわたるこの時代を代表する遺跡で、玦状耳飾を転用した石製装身具類の生産跡が前期後葉の遺構から検出された。

扇状地の本格的な開発は弥生時代に始まり、三輪地区や徳間・稲田地区など、扇状地両翼にも遺跡の分布域が拡大する。檀田遺跡（５）では、中期後半・後期後半の大規模な集落が検出された。中期後半の集落は、大半が栗林式土器編年における最古段階に位置付けられ、同時期の浅川端遺跡（７）・牟礼バイパスＤ地点遺跡（32）に対する拠点的な集落であったと考えられる。また、礫床木棺墓を含む９基の木棺墓群が居住域に隣接して検出され、当時の集落構造の一端が明らかになった。後期後半においては在地土器とともに多くの北陸系土器が出土した。同様の事象は本村東沖遺跡（10）・長野女子高校校庭遺跡（13）などでもみられ、北陸系土器の流入が本格化する弥生時代末に先んじる共伴事例として評価される。後期初頭吉田式土器の標式遺跡である吉田高校グランド遺跡（21）では、東北地方の天王山式土器の影響を受けた土器やアメリカ式石鏃が出土した。該期における東北地方との交流を示す数少ない遺物として注目される。なお扇頂部の迎田遺跡（28）では中期初頭、扇端部の国鉄車両基地遺跡（43、笹澤1970）では中期前半と、長野市内では出土例の少ない時期の土器が見つかっている。

古墳時代になると、それまで遺跡の分布が希薄であった扇央部の桐原地区や扇端部の平林地区でも遺跡の分布が認められるようになる。弥生時代末～前期の集落遺跡は扇頂部から扇央部に点在しいずれも建物跡の検出数が少ないが、檀田遺跡・返目遺跡（17）・桐原宮北遺跡（18）・桐原牧野遺跡（19）・吉田古屋敷遺跡（23）・吉田四ツ屋遺跡（24）で方形周溝墓が見つかっている。中期の本村東沖遺跡は該期の拠点集落とみられ、石製模造品の製作工房を含む56棟の建物跡が検出されたほか、多量の古式須恵器や子持勾玉・土鈴などの特殊な遺物が出土し

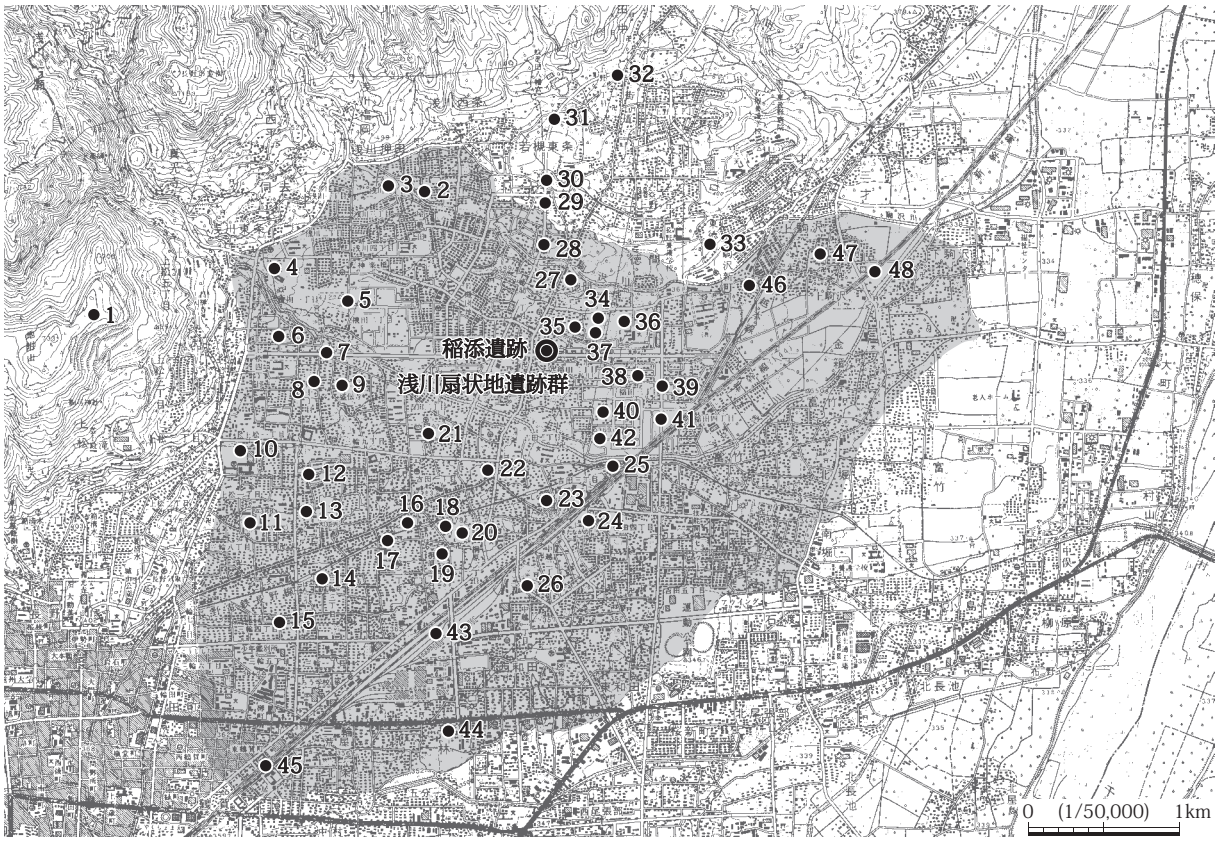
た。集落の存続期間から、地附山古墳群（１）の築造に直接関わった人々の居住域と考えられている。扇端部に位置する同じく中期の駒沢新町遺跡（46）は、５箇所の祭祀遺構が確認され、駒沢祭祀遺跡として一部が県史跡に指定されている。後期は、90棟の建物跡を検出した檀田遺跡を除けば、小規模な遺跡が点在している。湯谷東古墳群（６）は６世紀末頃構築された７基の円墳からなる古墳群で、現在は２号墳のみが残されている。

古代は扇状地全域で遺跡が確認され、特に扇状地北部の若槻地区、稲田・徳間地区、扇央部の桐原地区では比較的大きな規模の集落が形成される。特殊な遺物に、本堀遺跡（38）・牟礼バイパスＣ地点遺跡（31）・同Ｄ地点遺跡の７世紀代に遡る軒瓦や本遺跡一次調査の平安時代の瓦塔など仏教関連遺物、桐原宮北遺跡の稜椀・双耳杯・円面硯など官衙関連遺物がある。

中世は、各集落遺跡で見つかった遺構・遺物のほか、15箇所の城館跡が知られる。そのうち発掘調査が実施されたのは駒沢城跡（48）・桐原要害（高野氏館跡）（20）・相木城跡（13）の３箇所で、それぞれ堀と考えられる溝状遺構や柵列・掘立柱建物跡などが検出されている。

第３節　稲添遺跡一次調査の概要

稲添遺跡の一次調査は、昭和63～平成２年度の長野市稲田徳間土地区画整理事業に伴う調査において、二ツ宮



１地附山古墳群（７基）、２浅川西条遺跡、３小板屋遺跡、４松ノ木田遺跡、５檀田遺跡、６湯谷東古墳群（７基）、７浅川端遺跡、８古宇木遺跡、９押鐘遺跡、10本村東沖遺跡、11本村南沖遺跡、12下宇木遺跡、13長野女子高校校庭遺跡・相木城跡、14三輪遺跡、15本郷前遺跡、16桐原宮西遺跡、17返目遺跡、18桐原宮北遺跡、19桐原牧野遺跡、20桐原要害（高野氏館跡）、21吉田高校グランド遺跡、22吉田町東遺跡、23吉田古屋敷遺跡、24吉田四ツ屋遺跡、25辰巳池遺跡、26中越遺跡、27徳間中島遺跡、28迎田遺跡、29牟礼バイパスＡ地点遺跡、30牟礼バイパスＢ地点遺跡、31牟礼バイパスＣ地点遺跡、32牟礼バイパスＤ地点遺跡、33徳間本堂原遺跡、34徳間番場遺跡、35徳間榎田遺跡、36徳間柳田遺跡、37徳間中南遺跡、38本堀遺跡、39二ツ宮遺跡、40天神木遺跡、41権現堂遺跡、42樋爪遺跡、43国鉄車両基地遺跡、44平林東沖遺跡、45東居町遺跡、46駒沢新町遺跡、47上長畑遺跡、48駒沢城跡

図４　周辺遺跡位置図

遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡とともに行われた（長野市教育委員会1992）。

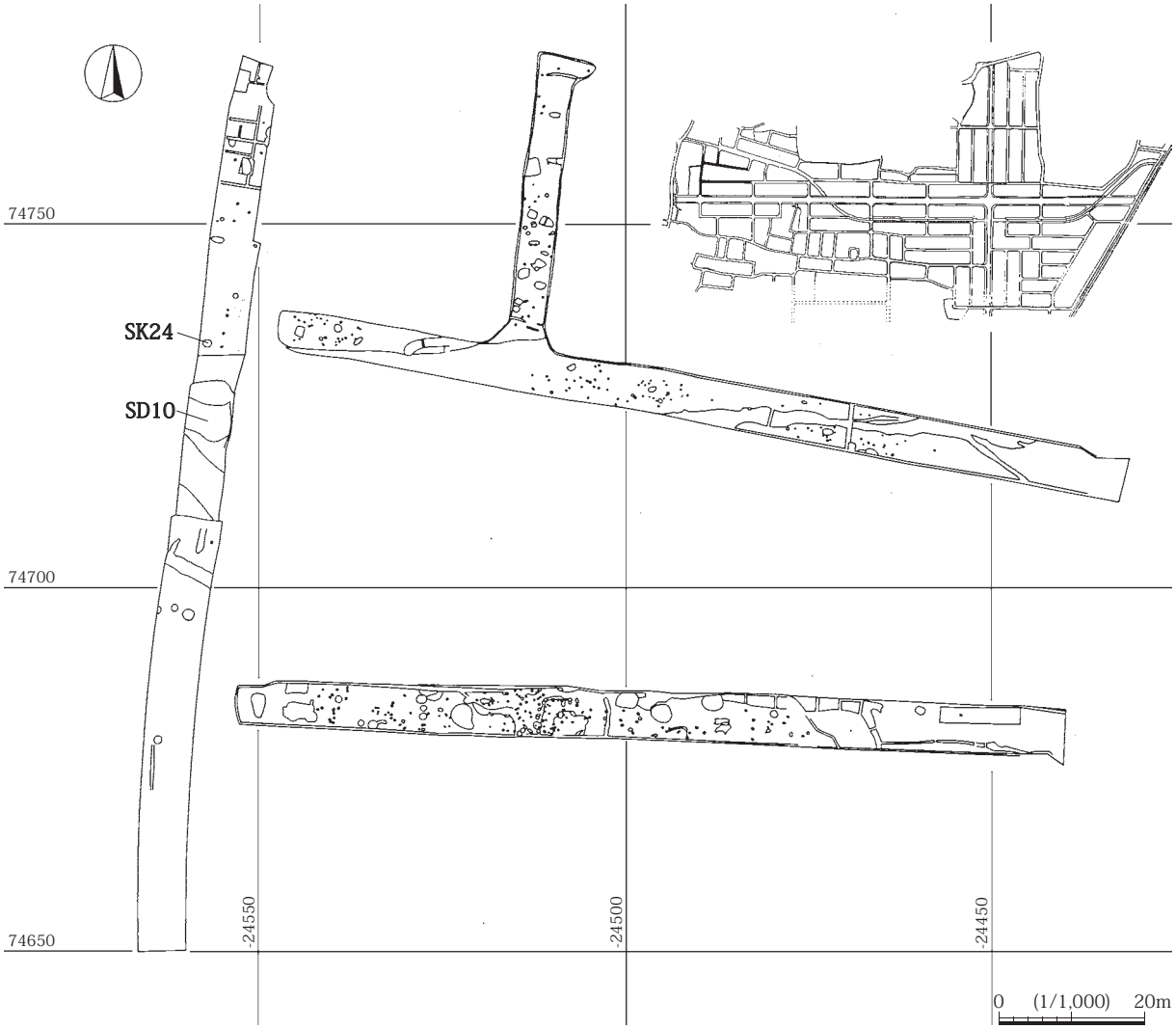
碁盤目状に延びる街路部分を対象としたこの調査において、事業地北西部の東西約140m、南北約100m の範囲、路線長にして約400m 分が本遺跡に該当する（図５）。遺構分布は全体に希薄で、調査範囲の縁辺付近は特にその傾向が顕著である。検出遺構には、古墳時代前期ならびに平安～中世の溝跡・井戸跡・土坑などがある。また明確な記載はないが、弥生時代中期・奈良時代の土器も出土している。

古墳時代前期の遺構は土坑２基のみで、ともに素掘りの井戸跡と考えられている。このうち24号土坑（SK24）では、廃絶に伴い一括投棄されたとみられる多量の土器が出土している。平安時代以降は溝跡や土坑が掘削されているのみである。なお平安時代前期の10号溝跡（SD10）からは、まとまった量の瓦塔片が出土した。

こうした状況から調査者は、北国街道が現在地に移されるまで調査地周辺は大規模な集落域として利用されていなかった可能性を考えている。

参考文献

笹澤浩1970「善光寺平における弥生時代中期後半の土器」『信濃』第Ⅲ期第23巻第12号、信濃史学会
長野市誌編さん委員会1997『長野市誌 第１巻 自然編』、長野市
長野市教育委員会1992『浅川扇状地遺跡群 二ツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡』長野市の埋蔵文化財第47集



（長野市教育委員会 1992 図 25 に加筆）

図５　一次調査地点調査区全体図

第Ⅲ章　調査成果

第１節　調査の概要

（１）基本層序

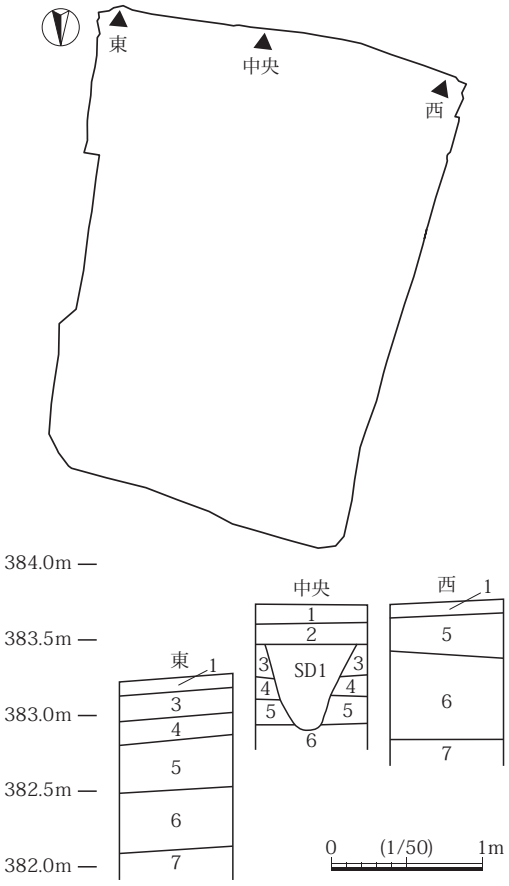
本調査の基本層序を調査区の南壁で示す（図６）。調査地は東向きの緩斜面上に位置するが、現況は駐車場であり、現道に近い東側を除いてほぼ平坦に均されている。また駐車場に造成される以前は水田で、それに伴う造成もなされている。しかしそれ以前に堆積した土層は本来の地形に沿って傾斜しており、場所により壁面に表れる土層が異なる。そこで図化にあたっては、西・中央・東の３箇所を抽出した。

１・２層は斜面地が耕地化されて以降の土層である。１層は現況の駐車場造成に伴うものとみられ、２層水田層を西と東で削平している。続く３層は遺跡形成後の堆積層、４層は包含層、５～７層が地山層である。図示範囲外となるが、中央土層確認地点の１ｍ西で３層が、西土層確認地点のすぐ東で４層および５層上面がそれぞれ２層水田層により削平されている。東西の比高は、６層上面で90cm、７層上面で75cm を測る。

検出面は原則的に５層上面に設定すべきところであるが、調査地内には造成に伴う削平が深くまで及んでいる場所があり、全体としては統一できていない。また中央土層にあるように、３層堆積層・４層包含層を掘り込むことが明らかな遺構も存在している。

（２）遺構と遺物の概要

これまで幾度か述べたように、調査地内には大規模な盛土造成とこれに伴う掘り込み、すなわち撹乱坑が大規模に認められる。前者については、南端部を除いたほぼ全域に認められ、特に中央から北東寄りにかけては基本層序６層まで達していた。また後者については、一般的な遺構の深度を上回る深さがあり、とりわけ北端部から北東部にかけて広範囲に及んでいた。撹乱坑の埋土には、山砕とみられる橙色土と、土器と現代物が混入した遺構と見まがう黒褐色土とがあり、前者が後者を切っている。包含層を含む土が撹拌されたのち、深い掘削を伴う盛土が行われたことを示すものであろう。こうした撹乱が遺跡に少なからぬ影響を与えたのは間違いなく、すでに湮滅した遺構も存在すると思われる。



1、表土
2、灰黄褐色土（10YR4/2、水田層）
3、褐灰色土（10YR4/1、～φ3cm の礫を含む、堆積層）
4、黒褐色土（2.5Y3/1、包含層）
5、黒褐灰色土（10YR2/1、地山）
6、オリーブ褐色土（2.5Y4/3、地山）
7、黒褐色土（10YR2/3、～φ10cm の礫を多く含む、地山）

中央土層

図６　基本層序

さて今回の調査では、竪穴建物跡１棟、溝跡４条、土坑７基、小穴27基を確認した。包含層を掘り込んで構築されたことが確実なSD１・２との関わりのほかに切り合い関係はほとんどない。年代については、竪穴建物跡が古墳時代前期と推定されるほかは土器の出土量が少なく特定が困難である。出土土器の総量は約6.0kgで、時期的には弥生時代中期・古墳時代前期・奈良時代～平安時代と長期間にわたっている。

以上の状況を踏まえて次節では、竪穴建物跡と、遺構内外の出土遺物について、報告を行うこととする。そのほかの遺構については、表１に概要をまとめた。なおSK７は、調査最終日に確認されたため掘削することができなかった。平面形態からSK３とほぼ同規模の土坑と推測される。

図７　調査区全体図

表１　遺構一覧表

遺構名	平面形	規模	備考	出土土器量
SB１	隅丸方形	長軸：5.23m、短軸：4.61m、深さ：0.03m		741g
SD１		検出長：16.74m、最大幅1.13m、深さ：0.50m		239g
SD２		検出長：24.14m、最大幅0.94m、深さ：0.58m		817g
SD３		検出長：5.90m、最大幅0.32m、深さ：0.14m	SD４を切る	144g
SD４		検出長：4.22m 最大幅0.32m、深さ：0.09m	SD３に切られる	62g
SK１	円形	長軸：140cm、短軸：120cm、深さ：17cm	SD１に切られる	
SK２	円形	長軸：94cm、短軸：90cm、深さ：20cm		105g
SK３	円形	長軸：136cm、短軸：127cm、深さ：112cm	SD２に切られる	20g
SK４	楕円形	長軸：130cm、短軸：80cm、深さ：50cm		20g
SK５	円形	長軸：66cm、短軸：56cm、深さ：41cm		295g
SK６	不整隅丸方形	長軸：78cm、短軸：45cm、深さ：10cm	SD２に切られる、獣歯出土	
SK７	円形	長軸：161cm、短軸：147cm	未掘	
SP１	円形	長軸：55cm、短軸：50cm、深さ：62cm		115g
SP２	円形	長軸：29cm、短軸：26cm、深さ：12cm		25g
SP３	円形	長軸：26cm、短軸：23cm、深さ：15cm		
SP４	円形	長軸：37cm、短軸：26cm、深さ：21cm		３g
SP５	円形	長軸：28cm、短軸：25cm、深さ：11cm		
SP６	円形	長軸：28cm、短軸：27cm、深さ：13cm		
SP７	円形	長軸：31cm、短軸：29cm、深さ：20cm		
SP８	楕円形	長軸：51cm、短軸：34cm、深さ：60cm		
SP９	円形	長軸：42cm、短軸：34cm、深さ：38cm		69g
SP10	円形	長軸：24cm、短軸：20cm、深さ：９cm		８g
SP11	円形	長軸：26cm、短軸：24cm、深さ：10cm		
SP12	円形	長軸：32cm、短軸：28cm、深さ：26cm		
SP13	円形	長軸：28cm、短軸：22cm、深さ：16cm		
SP14	円形	長軸：33cm、短軸：27cm、深さ：40cm		
SP15	円形	長軸：36cm、短軸：30cm、深さ：21cm		14g
SP16	円形	長軸：31cm、短軸：25cm、深さ：15cm		
SP17	円形	長軸：25cm、短軸：22cm、深さ：32cm		
SP18	円形	長軸：44cm、短軸：36cm、深さ：４cm		39g
SP19	円形	長軸：29cm、短軸：26cm、深さ：52cm		
SP20	隅丸長方形	長軸：50cm、短軸：26cm、深さ：７cm		30g
SP21	円形	長軸：28cm、短軸：25cm、深さ：14cm	SD２を切る	13g
SP22	円形	長軸：26cm、短軸：18cm、深さ：13cm		
SP23	円形	長軸：42cm、短軸：14cm、深さ：14cm		
SP24	円形	長軸：27cm、短軸：23cm、深さ：５cm		
SP25	円形	長軸：31cm、短軸：22cm、深さ：16cm		
SP26	円形	長軸：62cm、短軸：40cm、深さ：10cm		
SP27	円形	長軸：35cm、短軸：33cm、深さ：８cm		
重機・検出				2,133g
撹乱				1,074g

第２節　遺構と遺物

SB１（図８）

調査区の北西で確認したやや歪な隅丸方形を呈する竪穴建物跡である。覆土となる土器を多く含んだ黒褐色土の分布範囲を根拠に平面プランを設定したが、遺構上部をほぼ削平する盛土造成や、北にある包含層もしくは遺構覆土を埋土とする撹乱坑の影響で、非常に不明瞭であった。検出規模は北西－南東軸が5.23m、北東－南西軸が4.61m、深さは0.03m を測る。他遺構との切り合いはないが、南東辺が２箇所の撹乱坑、中央部が試掘坑によりそれぞれ掘り込まれている。覆土は、最も厚い中央で８cm を測り、周辺部にはほとんど遺存していない。柱穴はＰ１～Ｐ４を確認した。壁からの距離が一定でないが、主柱穴と考えられよう。床面は地山をそのまま利用し、全体的にやや硬く締まっている。炉・壁溝は確認できなかった。

出土土器は、土師器の壺（１・２）・甕（３）を図示した。出土遺物の様相から、SB１は古墳時代前期後半の所産と考えられる。

SD・SK・SP の遺物（図９）

SD１から弥生土器の壺（１・２）、SD２から弥生土器の壺（４～６）・甕（３・７・８）、SK５から土師器の壺（９）、SP１から土師器の甕（10）、SP18から土師器の高杯（11）を図示した。SD１と SD２は断面形態・覆土が共通しており同一遺構と考えられる。図６に示したとおり、遺跡形成後に耕地化されるまでの間に掘削されたもので、出土土器が掘削時期を示しているとは考え難い。９は平安時代、10・11は古墳時代前期と考えられる。これらが遺構の時期を示しているものか判断が難しい。

遺構外の遺物（図10）

土師器の壺（１・２）・甕（３）・高杯（４）・器台（５）、須恵器の有台杯（６）、無台杯（７）を図示した。１・２・３は、SB１覆土の黒褐色土周辺から表土掘削時に出土した。時期的にみて SB１に帰属する可能性が高い。５・６・７は、調査区北東の大規模撹乱坑に切られる撹乱坑から出土した。黒褐色を呈する埋土から出土しており、本来は包含層もしくは遺構覆土に含まれた土器であった可能性が高い。

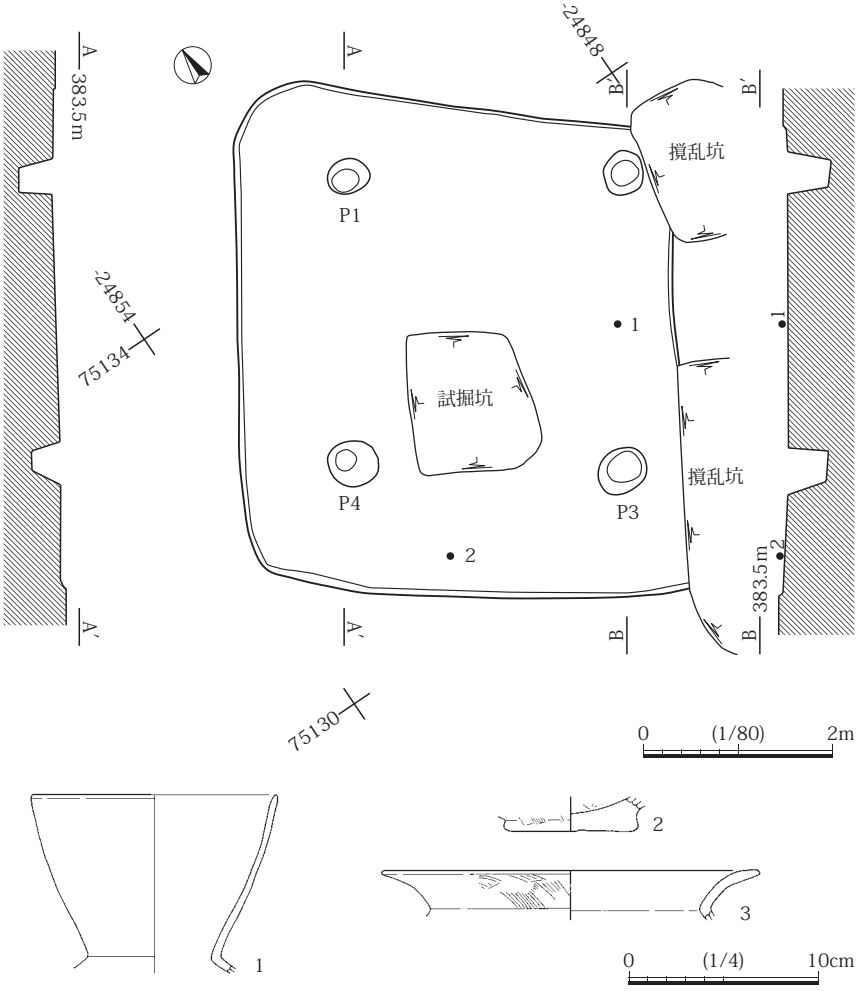


図８　SB１実測図・出土遺物実測図

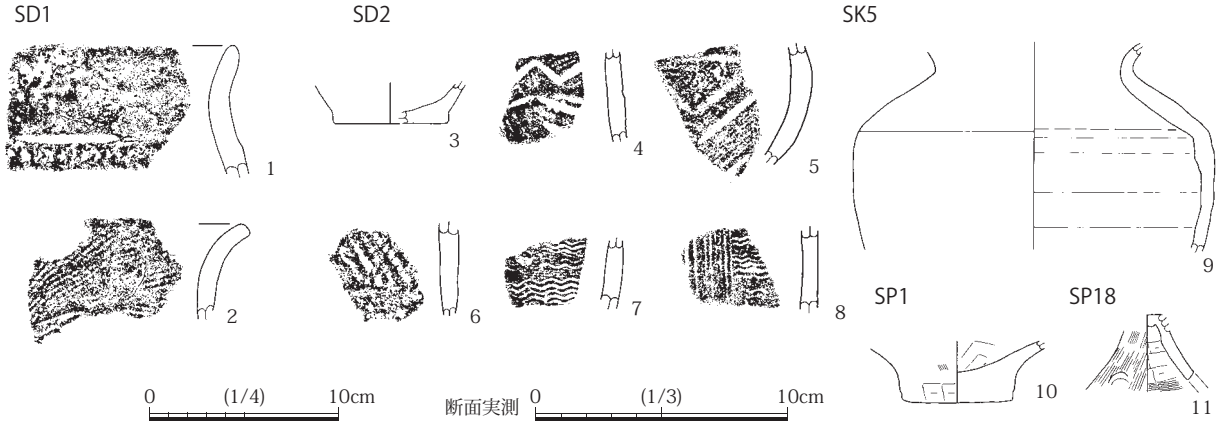


図９　SD・SK・SP 出土遺物実測図

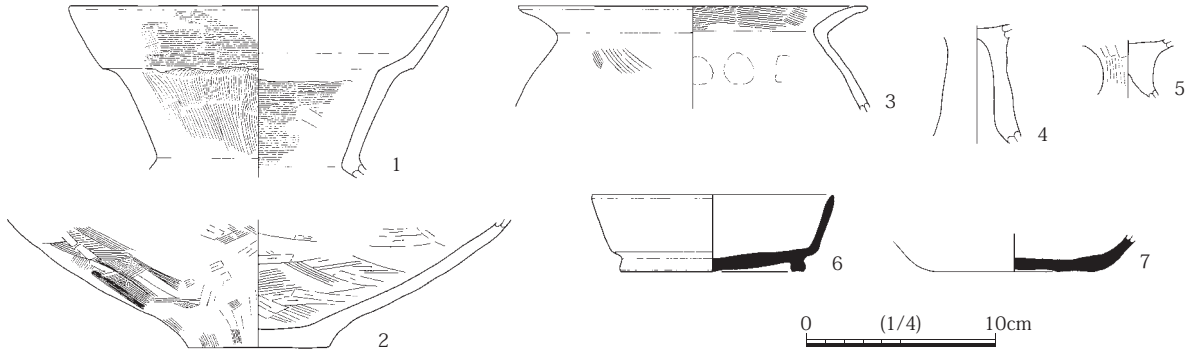


図10　遺構外出土遺物実測図

表２　土器観察表

・「遺存」は、図化範囲における残存率を分数で表記した。
・「色調」は、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修『新版 標準土色帖』の色名を表記した。ただし「にぶい」は「に」と略した。

図番号	掲載番号	遺構	種別	器種	遺存	色調	成形・調整	文様・備考	取上	実測番号
8	1	SB１	土師	壺	１/８	橙	外：縦ミガキ、内：摩耗		SB１	2
8	2	SB１	土師	壺	１/２	に橙	外：胴縦ハケ、底：ケズリ、内：ケズリ→ナデ	黒斑	SB１	1
8	3	SB１	土師	甕	１/８	に橙	口縁：横ナデ、外：斜ハケ		SB１	3
9	1	SD１	弥生	壺	―	褐灰		胴：沈線文・連続刺突文	SD１	2
9	2	SD１	弥生	壺	―	橙		口縁：縄文	SD１	1
9	3	SD２	弥生	甕	１/２	に褐	外：縦ミガキ、底：ケズリ、内：ナデ		SD２	6
9	4	SD２	弥生	壺	―	浅黄橙		胴：箆山形文内縄文充填	SD２	2
9	5	SD２	弥生	壺	―	に橙		胴：沈線文・箆山形文内櫛描文充填	SD２	4
9	6	SD２	弥生	壺	―	明褐		胴：縄文	SD２	3
9	7	SD２	弥生	甕	―	橙		胴：櫛波状文	SD２	1
9	8	SD２	弥生	甕	―	に橙		胴：櫛波状文・櫛垂下文	SD２	5
9	9	SK５	土師	壺	１/３	浅黄橙	ロクロ成形		SK５	1
9	10	SP１	土師	壺	１/２	に橙	外：ケズリ→ナデ、底：ケズリ→ナデ、内：ハケ→工具ナデ		SP１	1
9	11	SP18	土師	器台	２/３	褐灰	受内：ミガキ、脚外：縦ハケ→縦ミガキ、脚内：横ハケ→横ケズリ	円形透かし３箇所	SP18	1
10	1	遺構外	土師	壺	１/５	橙	外：口縁横ハケ→一部縦ミガキ 頸縦ハケ、内：口縁横ハケ→横ミガキ 頸横ハケ→一部ナデ		重機	2
10	2	遺構外	土師	壺	１/３	褐灰黄	外：斜ハケ→ケズリ、底：ケズリ、内：横ハケ→ケズリ	黒斑	重機	1
10	3	遺構外	土師	甕	１/６	に橙	口縁：横ナデ、外：胴斜ハケ→ナデ、内：口縁横ハケ 胴斜ケズリ→ナデ	内：指頭圧痕	重機	3
10	4	遺構外	土師	高杯	１/２	橙	杯内：不明瞭、脚外：不明瞭、脚内：ケズリ		重機	4
10	5	遺構外	土師	器台	２/３	に橙	受内：摩耗、脚外；縦ミガキ、脚内：ケズリ		SB２	3
10	6	遺構外	須恵	有台杯	２/３	褐灰	ロクロ成形、底：回転ケズリ		SB２	1
10	7	遺構外	須恵	無台杯	１/４	灰白	ロクロ成形、底：回転ヘラ切り		SB２	2

第３節　まとめ

今回の調査では、古墳時代前期後半の竪穴建物跡１棟と時期不明の溝跡・土坑・小穴を確認した。盛土造成や撹乱坑の影響もあって不明な点がきわめて多いが、弥生時代中期後半・古墳時代前期後半・奈良時代～平安時代の土器が遺構内外から出土しており、各時期の小規模な集落が周囲に展開していると推測される。基本的には、隣接する一次調査地点と同様の状況が追認できたといえよう（第Ⅱ章第３節参照）。

本遺跡で初めて確認した竪穴建物跡 SB１と同時期の建物跡は、100m 西で行われた北浦田遺跡の調査でも見つかっている（長野市教育委員会2024）。両遺跡は指呼の間にあり、居住域を共有する可能性も考えられる。

参考文献

長野市教育委員会2024『浅川扇状地遺跡群 北浦田遺跡』長野市の埋蔵文化財第172集

調査地遠景（航空写真、南より）

調査区全景（南東より）

写真図版 2

SB1（南西より）

SB1 覆土堆積状況（南西より）

SB1 遺物出土状況（図 8-1、北西より）

SB1 遺物出土状況（図 8-2、北西より）

SD1（東より）

SD2（東より）

図 9 - 9

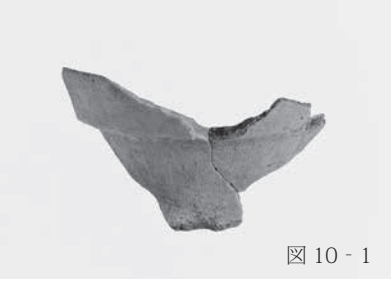


図 10 - 1

図 10 - 6

報 告 書 抄 録

ふ り が な	あさかわせんじょうちいせきぐん　いなぞえいせき２
書　　名	浅川扇状地遺跡群　稲添遺跡（２）
副 書 名	（仮称）中村医院新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第175集
編 集 者 名	清水竜太
編 集 機 関	長野市教育委員会長野市埋蔵文化財センター
所 在 地	〒381-2212　長野県長野市小島田町1414番地　TEL026-284-0004・FAX026-284-0106
発行年月日	2024年３月29日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
浅川扇状地遺跡群稲添遺跡（あさかわせんじょうちいせきぐんいねぞえいせき）	長野県長野市稲田二丁目1203番外（ながのけんながのし いなだにちょうめ ばんほか）	20201	A－082	36°67′67″	138°22′20″	20230405～20230425	690m²	病院建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
稲添遺跡	集落跡	弥生時代中期		弥生土器	
		古墳時代前期	竪穴建物跡　１棟	土師器	
		奈良時代～平安時代		土師器 須恵器	
		時期不明	溝跡　４条 土坑　７基 小穴　27基		

要旨	稲添遺跡は浅川扇状地の扇央部に立地する遺跡である。今回の調査では、古墳時代前期の竪穴建物１棟と時期不明の溝跡・土坑・小穴を確認した。不明な点が多いが、弥生時代中期・古墳時代前期・奈良時代～平安時代の土器が遺構内外から出土しており、各時期の小規模な集落が周囲に展開しているものと推測される。

長野市の埋蔵文化財第175集

浅川扇状地遺跡群
稲添遺跡（2）

令和６年３月29日　発行

発　行　　長野市教育委員会
編　集　　長野市埋蔵文化財センター
印　刷　　大日本法令印刷株式会社